

## 笠神の『三義俠者碑』の語る義民の姿と、碑文を書いた俳人・須藤元誓

蕨 由美 (房総石造文化財研究会会員)

### はじめに

印西市には、明治大正時代に建立された立派な記念碑や、歌碑・句碑が多数残されています。

今回の第Ⅰ部では、旧本埜地区笠神の南陽院境内に明治24年に建立された江戸初期の笠神の三義人を顕彰した「三義俠者碑」と、その時代背景についてお話します。

第Ⅱ部では、「三義俠者碑」の「撰文并書」に名を記す「須藤元誓」（俳号は梅理）についてと、須藤元誓が建碑に関わった句碑から見てきた地域の俳人たちの明治における文化ネットワークについてお話します。

### I 笠神の『三義俠者碑』の語る義民の姿

印西市本埜支所の前の広い田圃の中に突き出した独立台地の裾を巡る集落が笠神で、台地上には笠神城跡がありました。中世の頃までは、利根川と印旛沼が続く広い内海に面するこの笠神の集落は、中世村落の最前線でした。逢善寺文書の記述には、14世紀末「有徳ノ在家ノ仁」とよばれる「印西ノ笠上又太良禪門等ノ類」が出てきますが、笠神の地で「香取の海」の重要な航路を支配していた有力者のことと思われる。

笠神城跡の台地上西端の蘇羽鷹神社には戦国時代の遺構と思われる物見やぐら跡や大きな堀跡が残り、東側には領主の館跡に建てられた「南陽院」があり、その下には「船戸」の集落、西麓には「根古屋」の集落と「笠神社」があります。

字笠神前には、かつて城主の守り神で城山後方の山頂にあり、元禄15年(1702)にこの台地の下に遷座したと伝えられる「笠神社」があります。下照姫命を祀り、「笠神様」とよばれる神社境内には、左右二列に、幕末期に立てられた「百庚申」の石塔が立ち並び、その姿は壮観です。

笠神の島状の台地の南東中腹に建つ天台宗の南陽院の本堂の前には、基壇を築きその上に、台石に載せた高さ1.5mの自然石の石碑「三義俠者碑」が建立されています。

明暦2年(1656)に刑死した笠神の三義人を顕彰するために、南陽院住職と三義人の子孫、250名以上の賛同者によって、明治24年(1891)に建てられた石碑です。

この三義俠者碑は、印旛沼周辺の低地部の開発が盛んになった正保・明暦期、小林村との入会地「埜原」の帰属をめぐる闘争を物語る記念碑として注目されます。

中世では、当然だった村同士の實力闘争も、江戸前期では幕府による懲罰が不可避でした。そしてその犠牲となった村の「義人」に対して、当時は供養を続けるのみで、建碑はできませんでしたが、明治になって、このような立派な顕彰碑が建てられました。その建碑の背景として、佐倉惣五郎事件が膾炙したような近代の自由民権思想の高揚が見て取れます。

なお、「篆額」の武藤宗彬は蚕業振興に尽力した千葉郡長、「撰文并書」の須藤元誓は俳人半香舎五世梅里です。(須藤元誓については、第二部で述べます。また「柁谷文刻字」とあるこの碑の石工は、現在の安食ト杭の梶谷石材店の祖でしょう。)

## (1)「三義俠者碑」の銘文

この碑の銘文は、『千葉県印旛郡誌』（大正2年）と、そこからの引用である『印西地方よもやま話』（五十嵐行男著）にも載っていますが、2016年に改めて印西市教育委員会の石造物調査で、銘文を読み取りました。（その結果、『印旛郡誌』と『よもやま話』と十数カ所の相違がありました。）

三義俠者碑の写真と銘文は、別表で示しましたが、本文のみを現代文に意識してみました。（漢文の素養のない筆者の拙い訳文ですので、間違いをご指摘いただければ幸いです。）

### 本文の意訳

「人の群れは天に勝つが、天命が定まればまた人に勝つ。古より死する者は一に非ず」というが、身は極刑に死んでも、百世まで人の心を感動させるとはこのことであろう。

正保明暦（1644～1657）のころ、印旛郡笠神村に三人の「義俠者」がいた。

笠神の地は、丘をめぐる平坦で豊かな土壌で、その東北一帯には利根川と印旛湖がせまり、塩分が多く、アシとオギが茂る広漠とした地で、俗に埜原と呼ばれていた。当時は地租を納めることもなく、草木を刈り、鳥獣や魚を捕っていたこの地は笠神村に接し、多くの民がその利益に頼っていたために、また小林村との争いの地でもあり、両村ともにその利権は決まらず、幕府の領地となっていた。

正保2年（1645）4月のこと、幕府の役人が検分に来て地図をあらため、それ以後は両村の所有となるに至ったが、このことは笠神村にとってはその利益を専有できないことであり、村民はたいへん嘆き悲しんだ。

明暦2年のある月、笠神村はその地域を定めようとのぞんだが、小林村は応じず、その年の9月に再び幕府に訴えたが、見直しはなく、地図によって裁かれ、笠神村にとってその境は不利な結果に終わってしまった。

この時、三人の義俠の者があった。鈴木庄吉、岩井與五兵衛、岩井源右衛門の三人で、皆、優れた人物で、意気盛んで、物怖じしない不屈の気性が強かった。三人は、弁論をもって小林の民を正そうと村境まで臨んだところ、相手の衆は竹槍を突きつけてきたが、三人は落ち着いて反論した。相手の衆は取り囲んで捕まえようとし、三人は身を挺して奮然と闘って蹴散らせたが、数人を傷つけ、若干名を死なせてしまった。三人はその事情を聞いて、自首して罪を待った。

こうして埜原の地は、幕府の決定前の昔からの習慣に戻されて笠神村に属したが、三人はともに磔の極刑をもって殺された。その所は字押付で、時は明暦2年12月2日のことであった。村人は三人の亡骸を納めて葬り、後に許されてその地に小さな墓を建て、後世への記標とした。

それから埜原の地は、堤を築いて田を開墾し、稔り豊かな地域となった。今の埜原村である。こうしてこの地は笠神の本郷のものとなり、水陸の田は103町8段あまりとなった。

それ以来、村人は毎年10月に、十日にわたる法会を行い続け、それゆえに明暦から明治まで236年を経ても、水害や旱魃、蝗害、飢饉になることもない。今ここに村人が話し合っただけで財を醸出し、碑を慈眼山の上に建てることを決め、桑畑が滄海に変わるような大変化に備えることとした。

ああ、これも貧しい民が極刑で死んだことで、却って一つの村の富の源を作ったのであり、「身を殺して仁をなす」というべきことである。

子孫は連綿と末永くその血を受け継ぎ、この地に食してきた。今や明治の隆盛の世にあつて、玉を磨くように、三人の遺した気風を朽ちることなく伝えていこう。これはまさに「人の群れは天に勝つが、天命が定まればまた人に勝つ」ということである。（以下、漢詩の銘文は省略）

## （２）房総の義民・義人の供養塔・顕彰碑

房総石造文化財研究会の三明弘氏の調査では、房総の義民関係の石造物は推定を入れて 23 件あり、そのうち「義民」（＝村の代表として領主や幕府に直訴して犠牲になった人）関係が 10 件、「義人」（＝多くの人のために正義に殉じた人）関係は 13 件とのことです。

千葉県では、佐倉惣五郎のほか、安房の万石騒動の三義民、館山市の大神宮義民七人様供養碑の 3 事件が有名ですが、刑死直後の供養塔などは施政者から許されず、五十年近くたってから建てられることもあり、明治中期以降の建碑も 7 件に及びます。

23 件の中には、重税の減免直訴の義民や、飢饉に際し領主に無断で郷蔵を開けた名主、入会の草刈り場（まぐさ場）や用水をめぐる巡る争論での犠牲者のほか、漁場の境界や入会権、漁業権をめぐって隣村に実力行使して咎を受けた大事件も東京湾岸で 3 件あります。船橋市不動院の石造釈迦如来坐像に白米の飯を盛り上げるようにつける「飯盛大仏追善供養」は、船橋市の指定文化財にもなっていますが、その由来は、文政 7 年（1824）の漁場の境をめぐる争いで、相手方の侍を殴打して入牢した漁師総代の牢内の飢えを償うためといわれています。

## （３）義民を生み出す闘争と顕彰碑建碑の背景

保坂智氏の「近世初期の義民」（『国土舘大学人文学会紀要』 第 35 号 2002 年）によれば、義民を生み出す闘争は、一揆、共同体間闘争、村方騒動、その他の四類型に分けられ、共同体間闘争は、17 世紀に集中するとのことです。

さらに、その要因として第一に中世村落の権利であった自検断権・自力救済を近世権力が否定したにもかかわらず、複雑な在地の権利関係を生まれたばかりの公権力が完全に掌握しきれていなかったこと、第二に中世末から近世初頭に展開した開発が、入会地の草木の用益権や水をめぐる対立を激しくしていったことがあげられます。

そして、その開発による新たな村の確立に重要な権利獲得の実力闘争が、近世の公権力による処罰により犠牲者を生まざるを得なかったことがこの時代の義民物語であり、まさに、笠神村の三義人はこの典型でした。

また五十嵐行男氏は『印西地方よもやま話』で、江戸時代に幕府の裁定の反逆者の「義民」を密かに追悼することはあっても顕彰する事は叶わず、明治 22 年大日本帝国憲法の発布後、板垣退助らによる自由民権思想の高揚した明治 24 年という時代に、笠神の義人顕彰碑が建立されたことを指摘しておられます。

笠神に近い佐倉で、木内惣五郎が直訴し刑死したのは、笠神三義人事件の 3 年前の承応 2 年（1653 年）といわれています。地元に残る伝承を参考にしながら 18 世紀後半に創作された惣五郎物語は、幕末から全国に広まり、福澤諭吉により「古来唯一の忠臣義士」と称えられ、特に自由民権期には民権家の嚆矢として位置付けられました。

義民の顕彰が、全国各地で盛んになったのもこの頃であったことを考えると、この三義人顕彰碑は、江戸時代初期と明治中期の二つの時代の歴史を語る文化財であるといえるでしょう。



## II 「三義侠者碑」の「撰文并書」の須藤元誓（梅理）と明治俳諧の世界

この篆書体の格調高い「三義侠者碑」の文と書をしたためた人物は、「撰文并書」にある「須藤元誓」で、「江南亭梅理」の俳号で有名な文化人、そして医師でした。

『印旛村史 近代編史料集II』の「文化」の部に、昭和4年の「梅理家集」の抄録が掲載されており、その解説によれば、須藤元誓は弘化2年（1845）に、代々医家であった吉高村の前田元珉の三男として生まれ、名は理三郎。早くから和漢の書を修め、医術を究めたとのこと。

分家して須藤家を継ぐが、詩歌や俳諧は半香舎一世で梅丸の俳号を持つ父の元珉や、前田家を継いだ義兄の宗達こと二世梅麿の業績を受け継ぎ、俳諧結社である半香舎の五世となったとのこと。

「梅理家集」には、梅理の俳諧の師匠の三森幹雄の子の春秋庵準一が「叙」を、梅理の甥二人が「閲歴」を書いています。閲歴の中のエピソードに、16歳の時、父の死に心痛めて、それまで一生懸命に書写した漢籍や医術書を捨ててしまったほどだったとあります。

また、文久2年夏に麻疹が大流行した際は、兄の助手として昼夜奔走し、数百人の患者を救ったそうです。

千葉大学の前身の千葉病院医学教場で医学を修め、内外科医術免許を得て、医師として活躍する傍ら、寸暇を惜しんで、文学・詩歌を儒家などに、俳諧は父について学び、父没後は、三森幹雄を師として三十年以上、地域で活動し、その門人は八十余人。そして昭和4年（1929）、81歳で生涯を終えられました。



### (1) 須藤元誓（梅理）の句

『憑蔭集』（船橋大穴の齋藤その女傘寿の記念の句集）から十三才の時の句

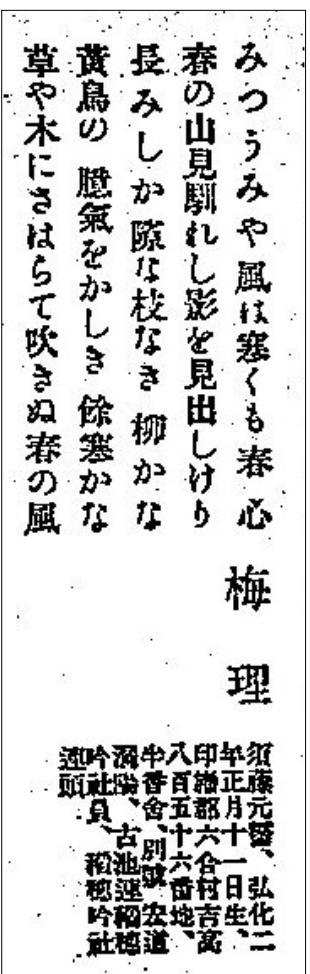
馳走とは聞くもききよし一夜鮓

『梅理家集』には、次の句が遺されています。

今朝はかり人に待たれて初鶉（はつがらす）  
 人の世や日傘も絹の二重張り  
 些（いささか）と風のあれと思ふや月の雲  
 松の風竹の風聞く炬燵かな

『明治俳人名鑑』（右のコピー写真）から

みつうみや風は寒くも春心  
 春の山見馴れし影を見出しけり  
 長みしか隙な枝なき柳かな  
 黄鳥の臆気をかしき余寒かな



草や木にさはらて吹きぬ春の風

(2) 印西市下井鳥見神社の芭蕉句碑

印旛沼の旧本埜村干拓地を南北に貫く県道 12 号線。江戸時代からの堤防道で、うねうねと曲がるカーブの左右の下には、洪水の度に堤が切れた「押堀（おっぼり）」といわれる池が点々と連なり、水害との闘いであったこの地の歴史を語っている道です。

その 12 号線沿いの押堀のひとつ、甚平池の北側に小さな祠を祀る下井鳥見神社があり、その前には自然石の芭蕉の優雅な句碑があります。

また、この鳥見神社の下には、郷土の先覚者の吉植庄一郎とその子息で歌人の庄亮の墓地や、印西大師の札所、また寛政 12 年銘の聖観音像十九夜塔や昭和 9 年銘の子安塔があります。

神社の前の句碑には「原中や ものにもつかす 鳴雲雀 はせを(芭蕉)」と流麗な字で、台石には「俳諧稲穂連」と刻まれています。「原中やものにもつかず啼く雲雀」＝中空高く舞い上がったひばり、ただ青い春の空だけがどこまでも続く。何ものにも束縛されないひばりの自由な姿と孤独さを描いた句

印旛沼周辺には、瀬戸の徳性院などいくつかの芭蕉句碑がありますが、この碑は特に優れた碑でしょう。というのは、句碑の形や銘の書体の良さもさることながら、最近の印西市教育委員会の石造物調査で明らかになった裏面と台座に刻まれた銘文とその内容です。

碑の裏面には「四世半香舎東水」の句「聞やうて淋しくもなし萩の声」と、明治 29 年銘で「江南亭梅理」による東水への賛と経歴、また台石には地域の俳人たちの名が刻まれています。

この鳥見神社の芭蕉句碑を建立した「江南亭梅理」とは、半香舎五世の「須藤元誓」。笠神の南陽院にある「三義侠者碑」の碑文の撰文と書を書かれた方でした。

(「聞やうて淋しくもなし萩の声」＝「萩の声」とは、ハギの花が風にゆれて立てるかすかな音。奥の細道の「終宵(よもすがら) 秋風聞やうらの山」を受けての句か? )

下井鳥見神社の芭蕉句碑 銘文と写真

正面	写真裏面	写真正面
<p style="text-align: center;">原中や ものにもつかす 鳴雲雀</p> <p style="text-align: right;">はせを</p>		
(台石正面)	(台石右面)	
連穂稲諧俳	<p>全 禁原 全 安食 萩原 吉高 幹事 井上東明 近藤東陽 増淵宏的 梶谷東○ 天野萩池 須藤梅理</p>	

下井鳥見神社の芭蕉句碑銘文 裏面・台座銘文

<p>台座左面</p> <p>吉高 須藤茶烟 松本翠翁 富井竹淵 須藤光東 富井梅徑 竹尾蝸庵 正木雨橋 正木青楓 富井香谷 香取西洲 加藤羽山 須藤春雨</p>	<p>裏面</p> <p>聞やうて 淋しくもなし 萩の声 四世半香舎東水</p>
<p>須藤師古 萩原 石井一徳 石井東風 石井石○ 石井竹齋 岩井東城 林 二木 石井岱水 笠神 岩井善則 弘海閑窓</p>	<p>東水叟氏小池名修家字清祐俗稱權四郎号精香舎下総印旛郡笠原村人文政六年四月廿日午及長学者於杉野東山受漢學於大石千秋傳算於兒島敬和習劍於中村一心齋修挿花於米一馬皆稱通又好俳諧師二世半香舎梅庵勳精頗極共與日常所吟詠至數千章後承統於三世半香舎有隣為其四世且而其門葉稱稱穂連者參百人嘗欲建芭蕉翁碑有年于此矣今茲門葉相謀創立此碑以翼贊其素志併壽叟七十四鶴齡云爾</p>
<p>台座裏面</p>	<p>明治廿九年四月江南亭梅理謹識</p>
<p>台方 青柳芳柳 山田 狩野新堂 狩野鶴里 武田篁村 平岡 藤巻昇泰 藤巻竹林 志水清麿 師戸 渡辺香浦 渡辺義芳 武藤一好 根本柳塘 土佐望雪 武藤雲城 小那木湖丘 馬場保彦 酒直 伊藤文庭 後藤素川 朝倉芳水 北辺田 湯淺逸利 奥津 山田東宗</p>	<p>安食 大野倭錦 石井東哉 今井香梅 大澤かをる 中臺水烟 弘海東順 清水東挽 鈴木東陵 岩井東善 石井東境 鈴木東游 春山東山 中根 柴橋露香 林原 吉植一隼 坂巻坂磨 吉植東湖 新井東光 近藤東輝 海老原東海 小林翠潭 小池東川 青山東開</p>

(3) 吉高の宗像神社境内と富井家宅内の芭蕉句碑

印西市(旧印旛村)吉高は、須藤元誓(梅理)が生まれ育ち活動し、そして生涯を終えたムラです。

春になると、須藤文左衛門(屋号)家の氏神の大桜が咲き、「吉高の大桜」として、印西市指定の天然記念物にもなっています。須藤元誓(梅理)の須藤太左衛門家は、大桜に一番近い大日堂横にあり、元誓のお孫さんが花見シーズンにタケノコご飯が名物の「峠の茶屋」を開いているお宅です。

その旧吉高村の鎮守である宗像神社には、境内から社殿に向って右側に、自然石の芭蕉の句碑があります。

表面に「このあたり 目に見ゆるもの みな涼し はせを」と流麗な仮名文字で芭蕉の句が、裏面に

は、松月舎光東の「たまたまに 錦も交る 落葉哉」の句が刻まれています。

裏面の句の選者は、半香舎梅理と春秋庵幹雄の2名で、建立は「明治三十五年四月一日」(1902)です。

半香舎梅理は須藤元誓。春秋庵幹雄とは、梅理とその父である半香舎梅丸の俳諧の師匠の十一世春秋庵三森幹雄その人です。そしてその下には、「俳友賛成員」として19名、「幹事」17名、「後見」2名(俳友賛成員・幹事と重複)、「企」1名(句の作者と重複)の名前(地名・苗字・俳号)が記されていました。

「たまたまに 錦も交る 落葉哉」の句の作者の松月舎光東は、「企」の須藤光東のことでしょう。その名の横には「通称太左衛門」とあり、須藤元誓(梅理)が継いだ家でした。

吉高宗像神社の芭蕉句碑 銘文と写真

写真裏面	正面	写真正面
	<p>このあたり 目に見ゆるもの みな涼し</p> <p>はせき</p>	

吉高宗像神社の芭蕉句碑 裏面銘文

裏面下段	裏面
<p>俳友賛成員 山田 狩野鶴里 武田童村 北辺田 湯浅逸利 伊藤祐雄 須賀 大須賀風趣 安食 弘海鸞仙 桑原水煙 鈴木東陵 山田洒笠 萩原 石井一得 廣瀬秋涯 石井竹齋 天野秋池 荳原 近藤東陽 吉植東湖 小久保柳堤 山口東渡 吉高 正末雨橋</p>	<p>たまゝに 錦も交る 落葉散 明治三十五年四月一日 選著</p> <p>松月舎光東</p>
<p>幹事 吉高 正木青楓 加藤羽山 須藤梅丘 富井香谷 須藤春海 富井梅圃 須藤梅林 小川芳村 土井静月 石月素碩 富井保一 土井柳涯 香取西洲 山田 狩野新堂 荳原 井上東明 荒井東光 安食 増淵宏的 後見 江南亭秋池 稲穂庵東水 企 須藤光東 通称大左衛門</p>	<p>春秋庵幹雄 半香舎梅理</p>

梅理と並ぶ選者の一人の春秋庵幹雄とは、江戸末期から明治初期の俳人三森幹雄（1829～ 1910 年）で、福島県出身。本名は寛、通称は菊治、号は初め静波で、藍染商人の手代として働きながら、地方の師匠のもとで俳句を学び、20 代半ばで江戸に出て志倉西馬に俳諧を学びました。明倫講社を組織し、1880 年、雑誌「俳諧明倫雑誌」を創刊し俳壇に一勢力をなしたが、神道の大成教に属して俳諧による教化運動を進め、正岡子規によって、旧派句会を代表する俳人攻撃された一人であるとのことです。（Wikipedia より）

なお、『梅理家集』には、三森幹雄が「嘉永の暮、奥州より江都へ上るの途次、絵の吉高に僑寄し」たことと、さらに二代に亘って交誼を重ねた縁で、幹雄の継嗣の春秋庵準一が、その「叙」を著したと書かれています。

#### （４）吉高の富井家の芭蕉句碑「蛙塚」

さらに、吉高の集落内の富井家の屋敷入口に、もう一基、「蛙塚」と呼ばれている自然石の芭蕉句碑があります。表面には、以下のような銘文が刻まれています

「 蛙塚

この塚むかし正保の頃富井外記てふ人

ありて多くの蛙を埋めしと言傳ひぬ

蛙子は目すり膾をなく音かな はせを」



明治 25 年（1892 年）4 月 15 日の建立。俳句の出典は『俳諧一葉集』とのことですが、存疑句とも言われています。「目すり膾」とは、「目擦り」がカエルが目をこすするという俗説から、カエルを熱湯に入れて皮をむき、芥子酢であえた昔の料理とのこと（goo 国語辞書）だそうです。

「蛙子は目すり膾をなく音かな」の句には、「おもしろうてやがて悲しき鶉舟かな」の芭蕉の句に通じる哀



れさと軽妙さが相混ざっているような気がします。

裏面には、故半香舎一世此君園、故二世梅麿、故三世有隣、故幽谷舎梧井、精香舎東水、竹窓茶烟、玉波亭萩池、そして江南亭梅理の蛙の句が刻まれているとのことですが、残念ながら、私有地内にあることと、徽章による汚染がひどく、その除去後に拓本とる必要があることから、今現在、まだ翻刻ができていません。

#### (4) 句碑に見る印旛～利根の俳諧ネットワーク

印西市の利根川北岸の利根町布川の徳満寺地蔵堂には、明治29年奉納の句額が掲げられています。吉高の宗像神社の句碑に記された38名の俳号には、下井鳥見神社の芭蕉句碑の70名と重なる俳号も多く、さらに、徳満寺地蔵堂の奉納句額にその名と句が掲載されている俳人が10名います。

徳満寺地蔵堂の奉納句額には、入集した99句の俳句と地域、俳号が掲載されていますので、そのデータ\*を参考にして、下井と吉高宗像神社の句碑と、布川の徳満寺地蔵堂の句額に重複して俳号が記されている23名の俳人名とその俳句10句を抜き出して一覧表にしてみました。(\*HP「タヌポンの利根ぼんぼ行」を参考)

下井と吉高の句碑と布川徳満寺地蔵堂の奉納句額に重複して記されている俳人名と句

地名	名字俳号	下井 鳥見神社句碑 (明治29年) の銘文	吉高 宗像神社句碑 (明治35年) の銘文	徳満寺地蔵堂句額 (明治29年)
安食	増淵宏的	幹事 増淵宏的	幹事 増淵宏的	門に積む年木や梅にまはり道
安食	鈴木東陵	鈴木東陵	俳友賛成員 鈴木東陵	-
吉高	加藤羽山	加藤羽山	幹事 加藤羽山	-
吉高	正木雨橋	正木雨橋	俳友賛成員 正木雨橋	幸に出る用もありはつ裕
吉高	須藤光東	須藤光東	たまゝに錦も交る落葉哉 松月舎光東・企 須藤光東	-
吉高	富井香谷	富井香谷	幹事 富井香谷	消へてその暗をふかめる花火哉
吉高	須藤春海	須藤春雨	幹事 須藤春海	-
吉高	香取西洲	香取西洲	幹事 香取西洲	我とわか心あたらしはつ日かけ
吉高	正木青楓	正木青楓	幹事 正木青楓	-
吉高	須藤梅理	謹識 江南亭梅理・幹事 須藤梅理	選者 半香舎梅理	似た形の山も揃ふて夕かすみ
山田	狩野新篁	狩野新篁	幹事 狩野新篁	-
山田	狩野鶴里	狩野鶴里	俳友賛成員 狩野鶴里	あけ花火表と裏はなかりけり
山田	武田篁村	武田篁村	俳友賛成員 武田篁村	-
中田切	小池東水	聞やうて淋しくもなし萩の声 四世半香舎東水	後見 稻穂庵東水	曙や花にまとまるひと心地
埜原	坂巻坂麿	坂巻坂麿	-	月影のまはらに更けて花すゝき
埜原	吉植東湖	吉植東湖	俳友賛成員 吉植東湖	-
埜原	荒井東光	新井東光	幹事 荒井東光	-
埜原	井上東明	井上東明	幹事 井上東明	-
埜原	近藤東陽	幹事 近藤東陽	俳友賛成員 近藤東陽	-
萩原	石井一得	石井一徳	俳友賛成員 石井一得	-
萩原	石井竹齋	石井竹齋	俳友賛成員 石井竹齋	雨晴れて細うなりけり枯すゝき
萩原	天野萩池	幹事 天野萩池	後見 江南亭萩池・俳友賛成員 天野萩池	掃初や塵にも交る青まつ葉
北辺田	湯浅逸利	湯浅逸利	俳友賛成員 湯浅逸利	-

徳満寺地蔵堂句額に記されているのは、地域と俳号と句のみで名字が不明でしたが、下井と吉高宗像神社の句碑には名字と俳号が記されているので、共通する10名に関しては、名字もわかりました。

また、下井の句碑には半香舎四世東水の、吉高の句碑には五世こと須藤梅理の門下の俳人の名が列記されていて、南は山田（印西市）、北は北辺田（栄町）におよぶ水郷地帯がその活動エリアであったと思われ、さらに利根町などでの句会にも参加し、交流していたことでしょう。

ちなみに、徳満寺地蔵堂句額の須藤梅理の句は「似た形（なり）の山も揃ふて夕かすみ」でした。